

ハングル

この文字は李氏朝鮮の第四代世宗の命によって 1443 年に作られ、1446 年に公布されたとされる。かつては“訓民正音”と呼ばれた。下の写真は現代のカップであるが、プリントされている内容は『訓民正音』（これは諺解本と呼ばれるもの。1459 年に刊行された『月印積譜』の巻首に載せられた「世宗御製訓民正音」）の冒頭部分。訓民正音（ハングル）を創製した目的が述べられており、おそらく韓国で、もっとも良く知られた古文であろう。



この文字には、単音を表わす子音文字(要素)と母音文字(要素)があり、それらを1音節単位に綴り合わせる。『訓民正音(解例本)』（1446年）には、さまざまな合字の例が挙げられている¹。たとえば、

- ・「ㄱ」gと「ㅌ」uと「ㄴ」nを上中下に配して「君」の漢字音 gunを表わす。
- ・「ㅇ」ngと「ㅍ」eを左右に並べその下に「ㅂ」bを配して「業」の漢字音 ngebを表わす。

このようにハングルは子音文字(要素)と母音文字(要素)よりなる単音文字であるが、音節単位にまとめられるところから音節文字の性格も備えているともされる。子音文字(要素)と母音文字(要素)の字形が何によって作られたかということについては、独創によるとする説から、パスパ文字など他に由来を求める説まで提出されている。もっとも現在では独創説が有力なようである。なお、表音文字であるところはパスパ文字などに原理を学び、音節毎に組み合わせるところは漢字に学んだとされるというような言われ方もする²。

¹ 羌信沆 1993 参照。

² 大江孝男 2001 参照。なお、ハングルの成立にあたって、何を参照したかという点につき、パスパ文字

■文字要素の配列法

さて、初期のハングルが縦書きで右行から左行に向かって読み進む点および1音節毎の切れ目はあるが単語など意味の切れ目に対応する分ち書きがなかった点は、漢字組織の影響であろう。それでは文字要素の綴り方はどうであろうか。ハングルは文字要素を左右・上下に綴って1単位を作り、それを漢字漢文のように縦に並べるわけであるが、1単位内の綴り方すなわち要素の配列法が何に範をとったものか問題となるのである。

漢語の方言字にも、2つの字を表音的に用いて1つの合体字としたものはある。また、かつて仏典の陀羅尼の漢字音訳において、複数の漢字を表音的に利用して1単位にまとめるといことがおこなわれた。もっとも陀羅尼の場合は安定した合体字ではないのであろうが。このように漢字漢文の世界でも文字を表音的に利用して1単位とする例はあるが、ハングルほど複雑ではない。

□文字要素の蛇行配列

中村 2008 によると、表音文字の多くは直線的(linear)に読み進むという性質を有しているが、そうではない表音文字も少なからず存在するという。そのような文字として契丹小字やハングルのあげている。いま、同論文にみえるハングルの例をあげると次のようである。

「読んだ本」を意味する「읽은 책 ('irg-'yn caig)」の要素の配列。

'irg	'yn	caig
①②	⑤	⑧⑨
③④	⑥	⑩
	⑦	

この例について中村 2008 に述べるところを引用すると次のようである。

・「全体を現在一般的な左から右への横書きとして見れば、②から③への部分は僅かではあるが逆方向に戻る形になる。これは本来縦書きであったものを横書きにしたために生じた現象であるが、表音文字の配列としては異例と言える。本来の縦書きとして見た場合、各々の要素は蛇行しながら上から下へと進む。その際、行は右から左へ進むにもかかわらず、表音要素の単位では左から右へ進む部分が随所に含まれている。表音文字としては最も若い文字とも言えるハングルにおいて、このような非合理的な配列がいかんして採用されたかについての詳細は不明である。」(1頁)

・「冒頭に言及したハングルの奇妙な配列も、漢字の影響を考慮すれば納得できよう。かつて西田龍雄氏はハングルの文字配列には契丹小字の影響があると唱えたが、むしろ双方共に漢字の影響を受けたと考えるべきではなかろうか。」(4頁)

以上を要するに、縦書きで、①→②、③←②と下に読み進むという配列すなわち蛇行配列の特徴は、契丹小字やハングルに共通したもので、いずれも漢字の「左→右→下」という偏旁の配列を参考にしたためであるという。漢字と契丹小字とハングルに共に文字要素

説と契丹小字説がある。古くは白鳥庫吉 1897 にパスパ文字説がある。Alexander Wylie.1859 に契丹小字説がある。もっとも後者は契丹小字を女真文字と誤解する。

の蛇行配列が見られるという指摘及び、ここでは紹介しなかったが契丹小字の蛇行配列が漢字の影響であるとする点は卓見であるとおもう。しかしながら、ハングルの蛇行配列については、他の可能性を考えても良いのかもしれない。この点は次に述べる。

□初期ハングルの奇妙な文字要素配列法

『訓民正音（解例本）』の“合字解”に出てくる語例をみると、首をかしげざるを得ないものもある。例えば、“隻（ひとつ）”はbjag、“隙”はbsgym、“酉時”はdergs bsdaiとある。

bjag	bsgym	dergs	bsdai
①②③	①②③	①	①②③④
④	④	②	
	⑤	③④⑤	

このように二重子音、三重子音を伴った音節となると、漢字偏旁の綴り方の発想から大きくはみ出してしまうようにもみえる。このような場合、契丹小字であるならば次のように要素を縦に連ねていくことになるのであろうが、上で例示したハングルはそうではない。

①②	①②	①②
③	③④	③④
	⑤	⑤⑥
		⑦

『訓民正音（解例本）』“合字解”の語例によると、ハングルにおける要素の配列は、縦は最大3層まで、横は最大4つまでというものとなっている。これが要素を配列する制限と意識されていたものであるのか否か定かではないが、横への拡張が比較的緩やかであることだけは確からしい。このような縦横への音節要素の拡張が、たまたま二重子音や三重子音を伴った音節の表記において自然に発生したものであるのか、それとも何かに範をとったものかということが気にかかる。なぜ気にかかるかというと、契丹小字のように縦に要素を連ねて表記することも可能であったはずであるが、事実はそのしなかった。また、縦書きのなかに、横に文字要素を長く連ねた文字を配するのはバランスが良いとはいえない。それにもかかわらず、なぜこのようなことをするのかと気になるのである。

そこで東アジアの文字を見渡してみると、類似した縦横への音節要素の拡張はチベット文字に見られる。もっとも、チベット文字の場合、基字と呼ばれるものを中心として縦横に音節要素が拡張されるわけであり、この点はハングルと大いに異なる。しかしながら、チベット文字では縦はほぼ4層まで横は4つまで要素の拡張がなされるわけであり外形は“合字解”のハングル語例に似ている。このような外形の類似をみると、ハングルは、漢字漢文の影響を受けつつも、チベット文字の配列なども参照した部分があるのかもしれないと思えてくるのである。

なお、これは中村 2008 も指摘していることであるが、チベット文字の1音節内の要素は左から右へ横書きされ同時に縦方向にも要素を重ねる蛇行配列である。これに範をとってハングルの要素を配するならば、漢字に範をとった場合と同様に、蛇行配列とならざるを得ないであろう。そうであるならば、ハングルの蛇行配列は漢字に範をとったともチベ

ット文字に範をとったとも言えそうである。

■毛筆字体のハングル

ハングルで“ir jien”（一錢）とある。錢の漢字音は現在では jen と綴られる。毛筆の字体となっている。とくに j の字形は通常のものとは異なっている。



李氏朝鮮末期(大韓)の銅貨。隆熙三年(1909年)

参考文献<発行年順>

Alexander Wylie. 1859. "On an Ancient Inscription in the Neu-chih language," *JRAS* VI, 1859, pp. 137-153.

白鳥庫吉 1897. 「吏道・諺文」, 『史学雑誌』第八編第一号。『白鳥庫吉全集 第三卷 朝鮮史研究』東京：岩波書店, 1970年所収, 107-113頁所収。

羌信沆 1993. 『ハングルの成立と歴史』東京：大修館書店。

大江孝男 2001. 「東アジアの諸文字」, 『言語学大辞典 別巻 世界文字辞典』河野六郎・千野栄一・西田龍雄編著, 三省堂, 2001年, 760-773頁。

中村雅之 2008. 「表音文字の配列」, 『KOTONOHA』第72号, 1-4頁。

(文責：吉池孝一.2010.2.16)